

巻頭言

明星大学発達支援研究センター 副センター長 竹内康二

このたび明星大学発達支援研究センターから紀要MISSIONの第2号が発刊される運びとなった。この紀要の意義は、同センターの研究員等が行っている各種プロジェクトの成果を報告する論文を掲載することや、国内外の発達支援に関する学術調査・研究を蓄積・発信することにある。

明星大学発達支援研究センターは、設立当初より「読み書き障害」「インクルーシブ教育」「自立支援」を組織研究のテーマとしており、本誌では関連する6つの研究を掲載することができた。特に、本号では本センター研究員以外からの投稿論文が3本含まれており、本センターの活動報告にとどまらない充実したラインナップとなっている。以下にその概要を簡潔に紹介する。

大橋智氏は、配慮を要する幼児への支援として行われる保育園を対象とした巡回相談についてその機能を明らかにするために、質問紙調査での自由記述をもとにKJ法によるモデル化とテキストマイニングを用いた属性分析を行った。

工藤陽介氏は、発達障害のある学生が就労体験としてインターンシップを経験することによって、学生の自己評価にどのような影響が生じるのか、インターンシップ先の支援担当者の評価と比較することで詳細な分析を行った。

布川友章氏と村山光子氏は、発達障害のある大学生が起こしやすい大学生生活場面でのつまづきについて、先行研究を参考にして集約した。さらに支援方法の1つであるスキルトレーニングの有効性について実践例を通して詳細な報告を行った。

いずれの論文も、発達支援領域における今日的な課題をテーマに質の高い分析や報告がなされており、今後の展開が楽しみな研究である。これからもセンター内外の研究者や関連領域の専門家と緊密に連携し、互いの成果を共有する場としてMISSIONを活用していきたい。また、本センターは設立時より、学問的探究のみならず発達支援に関わる支援者や保護者への情報提供のためにシンポジウムを定期的に開催している。今後は、シンポジウムに出席できなかった人や口頭発表だけでは十分な検討ができないという人のために論文・報告書の形で議論の内容をMISSIONで報告していきたい。

現在われわれが直面している教育・福祉領域の発達支援の課題は、急激かつ大きなうねりとなって様々な社会生活場面に影響を及ぼしている。この大きな変化の過渡期において、各人が知的探究の努力を続け、その記録を蓄積することが次世代への責務であろう。明星大学発達支援研究センターとその紀要MISSIONが少しでも人類に貢献できることを願って、筆者の責めを塞ぐこととしたい。